

## 『地域イメージ』は変えられるか

——「裏」「陰」「暗い」といわれる山陰地方のこころみ——

竹 村 弘

### はじめに 一名古屋市『ティファニー美術館』の松江市移転—

平成9年7月、名古屋市瑞穂区の『ルイス・C・ティファニー美術館』が鳥根県松江市に移転することが発表された。自他ともに認める日本随一の産業都市名古屋としては、今後は、愛知芸術文化センターの建設などで、文化・芸術面の充実を図ろうとしている矢先だけに、出鼻を挫かれ、足元をすくわれ、面子を失った形である。

この『ティファニー美術館』は、平成6年10月名古屋でも特に文化の香りの高い八事・雲雀ヶ丘の洒落たファッションビル「ザ・ステージ」内に開館したガラス・ミュージアムである。ニューヨーク五番街の高級宝飾店「ティファニー」の創始者の長男で、装飾芸術家のルイス・C・ティファニーのステンドグラス、テーブルランプなどガラス美術品約400点を所蔵する。館内を暗くし、照明効果を高めた独特の展示室ムードは、観光客にも人気があり、市内観光バスコースにも取り入れられ、年間9万人の入館者があった。

しかし、運営するグレコ・コーポレーションによると、「名古屋は産業都市のイメージが強く、人が集まらない」「駐車スペース、震災対策も不十分」で、「歴史と伝統のある町に移転を決めた」という。

移転先の鳥根県は、わが国でも最も過疎化、高齢化の進んだ地域の一つである。産業経済の発展が遅れ、人口が減少し、高齢化が進んでいる。しかし、松江市は、このために宍道湖畔に総面積5haの「湖北芸術文化村」を建設、中心の1.7haを同美術館に提供し、周辺道路、進入路、駐車場も整備する。図らずも、地域開発、文化・芸術振興に対する地元の熱意の差が、誘致条件の差となって現れた。

わが国は高度経済成長を達成し、米国に次ぐ世界第二位の産業大国となり、貿易は第一位の黒字大国、一人当たり国民所得は世界のトップクラスとなったが、「経済大国」が必ずしも「生活大国」ではないことは、今では、国民が等しく認識している実感であり、産業・経済面では日本に追い越されたり、もともと遅れている西欧諸国、北欧諸国などの方が、どうも恵まれた生活をしているらしい、というのが、日本人が抱いているイメージである。

同様に、産業・経済面では遅れている山陰地方ではあるが、その人々の暮らしは必ずしも劣っているわけではない。むしろ、「住居」「扶養・教育」「文化・余暇」「安心・安全」などの面では、過密で喧騒な都市地域よりも、はるかに暮らしやすい、豊かな生活を営んでいるとも言え

る。実体は、「裏」「陰」「暗い」といわれ、過疎化、高齢化の進展により集落が崩壊の危機に瀕している、というイメージとはほど遠いのである。その意味では、山陰地方はイメージで損していることになる。

これからの豊かな時代、高齢化時代を迎えるにあたり、地域開発の課題は、暮らしやすい、豊かな地域をつくることである。そのために、産業経済の開発は引き続き重要であるが、そこに住んでいる人々を主役に、文化、芸術、風俗、習慣、歴史、伝説、自然など、地域に存在するあらゆるものを「地域資源」として捉え、包括的に「地域づくり」に活用する必要がある。「地域イメージ」も重要な「地域資源」のひとつであり、プラスイメージとマイナスイメージとでは大きな違いを受ける。

本稿では、「裏」「陰」「暗い」というマイナスイメージの強い山陰地方で、地元がこころみた「山陰のイメージ・チェンジ」の提案と、地域イメージの形成に大きな影響力を持つと思われる「山陰発・中央行」「山陰発・全国行」のマスコミ情報の実態について、調査研究を行った。

## 第一章 山陰地方の実態——遅れた経済開発、暮らしやすさは優れる

### 1. 明治期以降は「裏日本」

「山陰地方」は、中国産地の北斜面をさし、狭義では鳥取・島根県を、広義では京都府や兵庫県・山口県の日本海側斜面を含む。「山陰」の地域名称は、古来「山陰道」の歴史的由来に因んでいる。「山陰道」は、大宝元年（701年）「大宝律令」で定められた古代律令時代の行政区画「五畿七道」のひとつで、現在の広義の山陰地方に当たり、丹波・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐の七か国（後に丹波から丹後が分かれた）を含む。

明治4年（1871年）廃藩置県で、丹後と丹波の東半分は京都府、但馬と丹波の西半分は兵庫県、因幡・伯耆・隠岐は鳥取県（隠岐は後に島根県）、出雲は島根県、石見は浜田県を経て島根県となった。

この山陰地方は、「古事記」「日本書紀」等で出雲神話が展開される太古の先進文明の地であり、日本海を挟んで大陸に通ずる表玄関に位置していたが、日本の資本主義経済の黎明期、地域産業発展の推進力となる鉄道の開設（松江駅開業は明治41年（1908年））が山陽に比べて20年遅れたことが、立ち上がりのハンディキャップとなり、続いて、国際貿易の主力が太平洋を経由する欧米に移り、太平洋側地域の産業経済が大きく発展する過程で、何時しか、太平洋側が「表日本」と呼ばれるようになり、日本海側は「裏日本」と呼ばれるようになった。更にその後、わが国の高度経済成長時代以降、太平洋ベルト地帯や瀬戸内海重化学工業コンビナート地帯などが目覚ましい発展を遂げたのに対し、山陰地方は取り残され、むしろ、労働力の供給地として若者が流出し、人口は減少、高齢化が進んだ。今日では「裏」「表」「暗い」と言われ、わが国の代表的な過疎地域のひとつに数えられるに至ったのである。

### 2. 山陰——過疎の代表地域

鳥取・島根の山陰両県は、中国山地北斜面に日本海に沿って、東西に細長く展開しており、島根県180km、鳥取県120kmと両県で延長300kmに及ぶ。この細長い地形は、人口や産業、都市機能の集積には不利である。また、後背山地は比較的急峻で、平野の奥行きが狭く、農業にも耕作条件は恵まれていない。

面積は、島根県は全国47都道府県中第18位 6,707千km<sup>2</sup>、鳥取県は同第40位 3,597千km<sup>2</sup>であるが、人口は小さく、島根県 771千人（全国比0.6%）、鳥取県 615千人（同0.5%）で、順位はそれぞれ第46位および第47位、つまり、最下位から1番、2番である。人口の増減は、島根県は昭和60年（1985年）をピークに、鳥取県は平成3年（1991年）をピークに、マイナスに転じており、最近5ケ年の実績も島根県は-0.2%、鳥取県は-0.1%となっている。

## 山陰両県の社会・経済指標

項 目			鳥 取 県		鳥 根 県	
面 積	1995	千km <sup>2</sup> (全国比%)	第40位	3,507 (0.9%)	第18位	6,707 (1.8%)
人 口	1995	千人 (全国比%)	第47位	615 (0.5%)	第46位	771 (0.6%)
人口密度	1995	人/km <sup>2</sup> (全国比%)	第37位	175 (51.9%)	第43位	115 (34.1%)
人口増加率	1990~95	%		-0.1		-0.2
平均年齢	1995	歳	第7位	41.5	第1位	43.2
中位年齢	1995	歳	第12位	42.4	第1位	44.7
高齢人口比率 (65歳以上)	1995	%	第6位	19.3	第1位	21.7
出生率	1995	人/千人	第32位	9.3	第43位	8.8
死亡率	1995	人/千人	第4位	9.4	第1位	10.0
県内総生産	1993	10億円 (全国比%)	第47位	1,944 (0.4%)	第46位	2,248 (0.5%)
一人当り県民所得	1994	千円/人 (全国比%)	第36位	2,529 (82.1%)	第45位	2,315 (75.2%)
事業所数	1991	千ヶ所 (全国比%)	第47位	34.7 (0.5%)	第45位	48.2 (0.7%)
第一次産業 就業者率	1995	%	第7位	14.2	第8位	14.0
一人当り 地方交付税額	1994	千円/人 (全国比%)	第3位	218 (333.7%)	第1位	234 (358.0%)
一人当り 地方財政歳出額	1994	千円/人 (全国比%)	第4位	651 (161.9%)	第1位	737 (183.1%)
国会選挙一票格差 衆議院	1997	小選挙区人口 千人	少ない順	①鳥根3区 244.6 (1.00)	②高知3区 254.7 (1.04)	
参議院 (自治省「住民基本台帳」)	1997	千人/議員	少ない順	①鳥取 309.7 (1.00)	②鳥根 385.4 (1.24)	

愛知県		全国	資料
第27位	5,114 (1.4%)	377,829 (100%)	建設省国土地理院「全国都道府県別面積調」
第4位	6,868 (5.5%)	125,570 (100%)	総理府統計局「国勢調査報告」
第4位	1,334 (395.8%)	337 (100%)	
	2.7	1.6	
第43位	38.1	39.6	総理府統計局「国勢調査報告」
第44位	37.2	39.7	
第43位	11.9	14.5	
第2位	10.6	9.6	厚生省「人口動態統計」
第43位	6.3	7.4	
第3位	29,932 (6.3%)	473,000 (100%)	経済企画庁「県民経済計算年報」
第2位	3,550 (115.3%)	3,080 (100%)	
第3位	381.8 (5.7%)	6,754.0 (100%)	総務庁「事業所統計調査報告」
第43位	3.5	6.1	総理府統計局「国勢調査報告」
第46位	2 (3.2%)	65 (100%)	自治省「都道府県決算状況調」
第42位	313 (77.8%)	402 (100%)	同上

③徳島3区 261.9 (1.07) ④島根2区 262.8 (1.07) 多い順 ①神奈川14区 576.2 (2.36) ②愛知10区 564.1 (2.31) ③愛知6区 561.8 (2.30)  
 ③高知 412.2 (1.33) ④福井 413.6 (1.34) 多い順 ①千葉 1,451.7 (1.34) ②東京 1,446.9 (4.67) ③大阪 1,434.6 (4.63)

県民の平均年齢、中位年齢、65才以上の高齢人口比率をみると、鳥根県はいづれも47都道府県中第1位で、県民人口高齢化の「三冠王」である。鳥取県もそれぞれ第7位、第12位、第4位と高齢化が進んでいる。両県とも出生率は低く、死亡率は高い。

県内総生産額は、鳥根県2兆2,480億円（全国比0.5%）、鳥取県1兆9,440億円（同0.4%）と小さく、その全国比シェアは人口シェアを下回り、順位は同じく最下位から1番、2番である。一人当たり県民所得や県内事業所数も小さく、産業構造の高度化が遅れているため、第一次産業就業者率が高い。

山陰両県の地方行政の財政状態は、県民一人当たり地方交付税額が、全国平均に対して、鳥根県は3.58倍、鳥取県は3.34倍で、鳥根県は第1位、鳥取県は高知県に次いで第3位と大きく、中央への依存度が高い。他方、県民一人当たり地方財政歳出額も、同様に全国平均に対して、鳥根県は1.83倍で第1位、鳥取県は1.62倍で、高知・徳島県に次いで第4位と大きく、山陰両県は、「地方行政の財政力が弱い上に、金使いが荒い」と揶揄されている。

また、国会議員選挙で、いわゆる「一票の重さ」が問題になる時、鳥取・鳥根両県の選挙区に比べて「何倍」という表現で対比されているように、国会議員一人当たり有権者数の最も少ない地域である。

このように、山陰両県地域は、産業の発展が遅れ、地方行政の財政力が弱く、若者が流出し、人口が減少、高齢化の進捗が著しいという「過疎」の典型的な現象を示していることは認めざるを得ない。周辺の一部山村では、村落の人口の減少が所帯の消滅へ、所帯の消滅が集落の崩壊の危機へと進み、過疎の末期的局面を見せているところも少なくない。こうしたことが、地域全体に重くのしかかり、暗い影を落としているのも事実である。

しかし、農村漁村の過疎化は、程度の差こそあれ、全国的な現象であり、山陰両県は人口規模、産業規模が小さく、その存在感が稀いために、一般に、実際以上に悲惨な過疎地域としてのイメージが広く伝わり過ぎて面も否定できない。かつて、わが国産業経済が、石油ショック、円高ショックで大きく揺れた時も、山陰地方ではその影響は小さく、また、バブル景気的好況を享受する度合いは小さかったが、バブル崩壊不況による痛みも軽かった。確かに、産業経済面では他の後塵を排せざるを得ないこととなったが、地域の「暮らしやすさ」、「生活の豊かさ」の面では、決して遅れているわけではなく、人々は地域に自歩を固め、着実に、暮らしやすい、豊かな地域社会を築きあげてきた、とも言えるのである。

### 3. 山陰地方の「生活の豊かさ」

地域開発の究極の目的は、暮らしやすい、豊かな地域を作ることである。

従来の「地方開発」は、「産業開発」「企業誘致」が主体であった。主として、遅れている地方に生産工場を建設し、地方経済を活性化し、雇用を増やし、所得を増やす。所得が増えれば、

生活水準や生活環境が向上し、教育水準や文化水準も向上する、という考え方であった。わが国の高度経済成長時代、列島改造時代を通じて、この「地方開発」が大変大きな役割を果たしたことは言うまでもない。わが国産業経済は、世界で類を見ない大きな発展を遂げ、今日では、米国に次ぐ世界第二位の産業大国、世界最大の貿易黒字大国、一人当たり国民所得は世界のトップクラスという地位を確保したのである。

しかし、遅れている地方の経済開発は、あくまでも手段であり、それ自体が目的であるのではない。地域の「暮らしやすさ」「生活の豊かさ」という面から見ると、何も、全て東京が優れていて、地方が劣っているということではない。東京圏の住宅事情、通勤地獄、交通渋滞、自然環境の悪さ等々をあげるだけでも、地方にも優れたところが多々あるのは明らかである。地域格差を「経済格差」のみで捉えるのではなく、暮らしやすさや、文化・余暇・安心・安全など、多角的、複合的な視野から評価する必要がある。

#### (1) 『国民生活指標』(PLI)

経済企画庁は、GNPに代わる新しい国民生活指標としてPLI (People's Life Indicators) を発表している。これは、①生活のフレームワークを「住む」「費やす」「働く」「育てる」「癒す」「遊ぶ」「学ぶ」「交わる」の8つの活動領域で分類し、②各活動領域での生活水準を「安全・安心」「公正」「自由」「快適」の4つの評価軸から重層的に測定し、③「国民生活選好度調査」によりウェイトづけした指標である。

このPLIによると、山陰両県については、鳥取県は8つの活動領域のすべてが、全国平均値50を上回り、島根県では「費やす」「遊ぶ」以外の6つの活動領域が平均値を上回っている。

47都道府県の順位で見ても、鳥取県は「住む」第3位、「育てる」「遊ぶ」第6位、「住む」第7位とトップクラスであり、「働く」第11位、「学ぶ」第12位、「交わる」第15位、「費やす」第18位も上位グループに属する。

島根県は、「交わる」第6位、「育てる」第9位が優れ、「遊ぶ」の第34位が劣るものの、他は中の上位グループに属している。

因みに、愛知県は、県内総生産第3位、一人当たり県民所得第2位と、わが国のトップクラスの経済力を誇る地域であるが、「国民生活指標」(PLI)で見ると、全国平均を上回っているのは「費やす」「働く」の2領域のみで、他の6領域は平均値に及ばない。順位で見ても、「費やす」が第1位と突出して優れる他は、概して中位グループに属し、特に、「育てる」第43位および「住む」第39位は劣位にある。総合指数は発表されていないが、総合的にみて、おおよそ中位グループに属するものと考えざるを得ない。

#### (2) 『生活大国度指数』

筆者は、経済企画庁に先駆け、昭和60年(1985年)以降、数次にわたり、「生活の豊かさ」から見た地域格差の測定を行っている。きっかけは、当時1ドル=250円程度であった為替レ

## 経済企画庁「新国民生活指標」(PLI) (平成8年版)

領域	住む		費やす		働く		育てる	
鳥取県	第7位	52.01	第18位	50.31	第11位	52.20	第6位	55.62
島根県	第12位	51.75	第25位	49.50	第20位	50.86	第9位	54.40
愛知県	第39位	48.34	第1位	54.83	第14位	51.37	第43位	43.84
三重県	第15位	51.58	第15位	51.00	第17位	51.14	第16位	53.02
岐阜県	第17位	51.37	第11位	52.50	第30位	49.01	第25位	50.07
ベスト①	富山	58.54	愛知	54.83	長野	58.15	北海道	59.96
②	福井	55.58	東京	53.73	東京	56.62	秋田	57.82
③	秋田	54.20	福井	53.61	山梨	54.47	徳島	56.24
④	奈良	53.36	山梨	53.51	香川	54.19	岩手	55.85
⑤	山形	53.26	石川	53.35	富山	53.97	大分	55.73
ワースト①	東京	38.62	青森	43.50	沖縄	42.66	神奈川	39.41
②	大阪	45.32	熊本	44.27	鹿児島	44.98	埼玉	41.52
③	福岡	45.75	長崎	46.63	青森	45.36	大阪	42.19
④	神奈川	46.11	奈良	46.65	長崎	45.39	沖縄	42.88
⑤	兵庫	46.40	鹿児島	47.29	奈良	46.15	愛知	43.84

1. 指数は偏差値方式による。平均値=50

2. 領域の内容 「住む」：住居，住環境，近隣社会の治安等  
「費やす」：収入，支出，資産，消費生活等  
「働く」：賃金，労働時間，就業機会，労働環境等  
「育てる」：育児・教育支出，教育施設，進学率等



癒す		遊ぶ		学ぶ		交わる	
第3位	54.29	第6位	53.23	第12位	52.08	第15位	50.51
第23位	50.36	第34位	48.49	第16位	51.67	第6位	52.80
第26位	49.81	第23位	49.60	第23位	49.89	第20位	48.86
第41位	46.85	第11位	51.74	第20位	50.06	第23位	49.67
第27位	49.74	第26位	49.38	第17位	51.43	第12位	51.19
福井	57.86	東京	58.21	石川	59.99	滋賀	56.14
熊本	54.39	北海道	56.67	富山	58.53	長野	54.91
島根	54.29	長野	56.08	東京	58.27	山梨	54.77
沖縄	52.89	福井	55.74	福井	57.58	福井	53.70
宮崎	52.54	富山	54.53	長野	56.59	石川	53.46
栃木	45.36	佐賀	45.58	福島	43.00	青森	54.78
宮城	45.47	宮城	45.70	沖縄	43.76	埼玉	46.18
茨城	45.87	岩手	45.88	埼玉	44.10	千葉	46.30
埼玉	46.01	奈良	46.20	青森	44.35	栃木	47.16
福島	46.27	鹿児島	46.98	熊本	45.22	広島	47.87

(資料) 経済企画庁「新国民生活指標」平成8年版

「癒す」：医療，保険，福祉サービス等

「遊ぶ」：休暇，余暇施設，余暇支出等

「学ぶ」：大学，生涯学習施設，文化的施設，学習時間等

「交わる」：婚姻，地域交流，社会的活動等

トが、昭和60年9月先進5ヶ国「プラザ合意」により、1ドル=150円に切り上げられた時である。その結果、日本の一人当たりの国民所得が、ドイツ、フランス、イギリスはもとより、それまで第1位のアメリカを抜いて、欧米先進国のトップに躍り出た。マスコミ等で「日本は豊かになった」ということが、しきりと報じられた。しかし、計算上そうなったにしても、自分たちの暮らしそのものは、何も変わっていなかったわけで、アメリカ、ヨーロッパと比べて日本の方が豊かだと言われても、その実感を持つ人はほとんどいないというのが実情であった。「何か違うのではないか」と調べてみると、分かったことは、国の経済力と国民の生活水準との間に、大きな乖離があるということである。つまり、国の経済力が強くても、国民の生活水準が同じように高いとは限らない。その後よく使われるようになった言葉で言えば、日本は「経済大国」であるが、「生活大国」ではない。「生活小国」であるということである。そこで、これからは国民の生活水準の高い国をつくっていかねばならない。何がどれだけ遅れているか、何をどれだけ高めていかねばならないか、を示す「ものさし」が必要であるということで、「豊かさ指数」を考え出したものである。

国内の地域格差も同様に、産業経済が発達している地域が、必ずしも暮らしやすい、生活の豊かな地域とは限らないわけで、「県内総生産」や「一人当たり県民所得」に変わる新しい地域格差の指標が必要となる。そこで、筆者は、『生活大国度指数』を用いた「地域カルテ」を作成し、47都道府県の地域診断を行った。

『生活大国度指数』の構成は次のとおりである。

人々の生活は、基本的に『経済生活』『家庭生活』および『社会生活』の三つから成り立っている。

1. 『経済生活』は「所得生活」と「消費生活」に分かれる。

- ① 「所得生活」は、可処分所得の大きさが重要であるが、そのための労働時間や通勤時間は、少しでも短い方がよい。また、女性の就職率は、労働環境の成熟度を示すとともに、女性の自立度の面からも注目される。
- ② 「消費生活」では、消費水準の高さ、商店街の賑わい、ショッピングの便利さ、物価の安さが指標になる。また、純貯蓄の大きさは、家具・電気製品の購入、大型レジャーなどへの蓄えとして、「消費生活」のゆとりを示すと考えられる。

2. 『家庭生活』は、生活者の本拠地であり、「住居」で日常生活を営み、子供を育て、教育し、家族が病気となれば看病し、老後をおくる「扶養教育」の場である。

- ① 「住居生活」で、住宅は広ければ良いというものではないが、概して広い家の方が、質的にも優れていることは推定できる。公共下水道による水洗トイレが望ましい。最新家電製品が備わっていれば、他の器具も整っていよう。マイカーは家庭の必需品となっている。
- ② 「扶養教育生活」では、医療施設や児童・老人福祉施設、保育園・幼稚園等の充実度が指標になる。高等教育については、大学進学率が指標になる。

3. 『社会生活』は、近年特に注目されるようになった「生活環境」、および「文化余暇生活」からなる。

- ① 「生活環境」は、都市公園、道路舗装率など生活基盤社会資本整備が重要であると同時に、公害や犯罪が少ないという地域社会の安全も大切な要素である。
- ② 「文化余暇生活」では、生涯学習などの地域の文化交流の場となっている図書館の充実度、知識活動の水準を示す図書・雑誌・新聞等小売販売高、および、実際の旅行・行楽、スポーツ・趣味・学習行動者率が指標になる。余暇活動は、豊かな時代、長寿時代の新しい生き甲斐づくりとして重要である。

このように考えると、生活を構成する「所得生活」「消費生活」「居住生活」「扶養教育生活」「生活環境」および「文化余暇生活」の六つの領域には、それぞれ数値で示すことができる指標があるので、その代表的な指標を比較することにより、『経済生活』の指数、『家庭生活』の指数および『社会生活』の指数を作成し、それらの水準を推定することができる。更に、それを総合化して、『生活大国度指数』を作成することができるのである。

総合指標『生活大国度指数』でみると、鳥取・鳥根の山陰両県は、それぞれ106.4および105.5と、全国平均=100を上回り、全国47都道府県の順位は、それぞれ第4位および第6位と、トップグループである。

領域別にみても、鳥取県は、「所得生活」第6位、「居住生活」「扶養教育」および「生活環境」第7位が優れ、全国平均を下回るのは、余暇活動が低調なことによる「文化余暇」94.9（第34位）のみであるので、総合して『生活大国度指数』が第4位となった。

鳥根県は、「生活環境」第3位、「扶養教育」第5位が優れ、その他も一応の水準にあり、全国平均を下回るのは同じく「文化余暇」第33位のみであるので、総合して『生活大国度指数』が第6位となった。

したがって、山陰地方の地域診断は、「可処分所得（鳥取98.5、鳥根97.1）こそ低位であるが、生活環境はトップクラスで、住居、扶養教育も優れる。旅行・行楽、スポーツ・趣味等の余暇活動が低調なため、文化余暇生活（同94.7、92.9）の水準は低い」ということで、言い換えると、山陰地方の人々の暮らしは、「大変暮らしやすい、恵まれた生活環境の中で、あまり楽しみもせず、ひたすら真面目に働いている」というイメージが浮かび上がってくる。

愛知県の『生活大国度指数』は102.0、順位は第16位で、中の上位グループに属する。内訳で、際立っているのは『社会生活』の「文化余暇」が第4位とトップクラスにあることである。比較的優れているのが、「消費生活」第11位および「居住生活」第15位。他方、やや劣るのは「扶養教育」第30位および「生活環境」第38位である。愛知県の人々の生活のイメージは、「やや劣位の生活環境、扶養教育環境の中で、所得生活の水準に比して、消費生活、居住生活の水準はやや高く、極めて活発な文化・余暇生活を楽しんでいる」ということになる。

以上のとおり、産業経済面では最下位クラスで、過疎化、高齢化の進んだ山陰両県であるが、

## 『生活大国度指数』による地域診断

			鳥 取 県		鳥 根 県		
			実 数	指 数	実 数	指 数	
経 済 生 活	所得生活	可処分所得 労働時間	千円/世帯 時間/月	428 202	98.5 100.6	424 204	97.1 90.9
		通勤時間	分/日	34	108.5	32	111.4
		女性就業率	%	57.1	126.5	53.4	113.3
		順 位		第6位	108.5	第20位	103.2
	生 活	消費生活	小売販売額 風俗営業店	千円/世帯 件/10万人	2,993 98.5	106.3 92.7	2,863 145.0
消費者物価			全国=100	97.0	120.3	99.3	108.1
純貯蓄額			千円/世帯	6,368	97.5	7,297	103.8
順 位				第12位	104.2	第13位	104.0
順 位			第6位	106.4	第14位	103.6	
消 費 生 活	居住生活	宅床面積	m <sup>2</sup> /戸	120.38	113.7	121.18	114.3
		公共下水道	%	18.0	90.6	9.0	82.8
		乗用車保有	%	73.1	93.8	69.1	90.1
		最新家電品	%	12.2	139.3	11.0	131.0
	順 位		第7位	109.4	第11位	104.5	
	扶 養 教 育	医 療	医師/万人	21.5	124.3	18.3	108.6
		福祉施設	所/10万人	53.0	118.3	54.8	120.3
		保育幼稚園	所/10万人	41.7	109.9	50.7	123.9
		大学進学率	%	31.1	98.7	32.2	101.4
	順 位		第7位	112.8	第5位	113.6	
順 位		第4位	111.1	第5位	109.1		
社 会 生 活	生活環境	都市公園	m <sup>2</sup> /人	7.66	107.1	11.08	128.2
		道路舗装率	%	64.5	105.3	47.6	88.8
		公害	件/10万人	23.6	120.5	26.0	119.0
		犯罪	件/千人	11.2	100.2	8.6	111.7
	順 位		第7位	108.3	第3位	111.9	
	文化余暇	図書館蔵書	冊/千人	1,125	95.3	1,489	109.2
		図書等販売	円/年人	23,582	101.6	20,165	91.3
		旅行・行楽	%	74.9	88.2	75.0	88.4
		スポ・趣味	%	—	94.7	—	92.9
	順 位		第34位	94.9	第33位	95.5	
順 位		第22位	101.6	第16位	103.7		
『生活大国度指数』			第4位	106.4	第6位	105.5	

愛 知 県		三 重 県		岐 阜 県	
実 数	指 数	実 数	指 数	実 数	指 数
446	104.6	451	106.3	505	124.9
201	105.5	200	110.3	207	76.4
49	86.2	41	98.1	41	98.1
51.5	106.6	50.0	101.2	54.9	118.7
第24位	100.7	第18位	104.0	第15位	104.5
3,170	113.8	2,956	104.8	3,260	117.7
126.7	99.1	106.8	94.6	228.1	122.1
102.6	90.6	101.3	97.5	100.3	102.8
8,970	115.2	8,141	109.6	8,074	109.1
第11位	104.7	第19位	101.6	第2位	112.9
第20位	102.7	第19位	102.8	第5位	108.7
92.53	92.9	107.97	104.4	117.94	111.9
40.0	109.7	9.0	82.8	25.0	96.7
99.7	118.6	92.0	111.4	109.8	127.9
5.5	92.9	5.8	95.0	7.1	104.0
第15位	103.5	第25位	98.4	第5位	110.1
14.9	91.9	14.7	91.0	13.2	83.6
33.7	97.0	36.1	99.7	32.5	95.6
22.4	80.0	41.4	109.5	32.8	96.2
39.8	120.3	35.0	108.4	35.3	109.2
第30位	97.3	第18位	102.1	第32位	96.2
第20位	100.4	第21位	100.3	第10位	103.2
4.67	88.6	4.96	90.4	5.15	91.6
70.9	111.5	44.4	85.7	58.9	99.8
83.0	81.2	88.8	77.4	54.0	100.4
14.3	86.6	9.9	106.0	10.5	103.3
第38位	92.0	第45位	89.9	第26位	98.8
1,392	105.5	861	85.2	1,012	91.0
30,586	122.6	19,937	90.7	20,635	92.7
86.7	118.1	81.2	104.1	84.8	113.2
—	108.6	—	95.8	—	106.2
第4位	113.7	第36位	93.9	第22位	100.8
第17位	102.9	第41位	91.9	第26位	99.8
第16位	102.0	第28位	98.3	第8位	103.9

(資料) 拙著「目指せ、生活大国先進地域」1993年

「生活の豊かさ」の面では、「国民生活指標」でも、『生活大国度指数』でも、むしろ上位グループの属しており、「裏」「陰」「暗い」といわれる「山陰イメージ」とはかけ離れた、暮らしやすい「豊かな地域」の実態が明らかとなる。

一方、県内総生産第3位、一人当たり県民所得第2位と、わが国のトップクラスの経済力を誇る愛知県が、「生活の豊かさ」の面から見ると、上位グループには入れず、山陰両県より下位に位置づけられることを、愛知県民はどのように考えるべきであろうか。生活者の立場から言えば、地域開発の究極の目標は、暮らしやすい、生活の豊かな地域を作ることである。世界に誇る「経済大国」日本の国民が、欧米先進国と比べて豊かさの実感を持たず、「生活大国」づくりが課題となっているのと同じ意味で、経済先進県愛知の課題が何であるかを明示すると言えよう。

## 第二章 山陰のイメージ・チェンジのころみ

### 1. 鳥取・島根両県経済同友会の合同懇談会共同見解

「豊かな地域づくり」に、「地域イメージ」は重要な要素である。「地域イメージ」も大切な地域資源のひとつであり、「地域イメージづくり」は、地域開発の延長上にある重要な課題である。

平成元年（1989年）、鳥取県・島根県の両県の経済同友会が合同で懇談会を開催し、両県地域のキャッチ・フレーズとして新地域名称『南日本海地方』を用いることを提唱した。これは、当時、多くの企業がCIを用いて企業の新しいイメージづくりを行ったのと同じように、キャッチ・フレーズとして『南日本海地方』を用いることにより、「裏」「陰」「暗い」と言われる山陰地方のイメージ・チェンジを図ろうというものである。筆者は、島根経済同友会常任幹事として、両県合同懇談会を担当し、このころみに積極的に荷担した。

この合同懇談会で発表された『共同見解』の要旨は、次の通りである。

鳥取県経済同友会・島根県経済同友会合同懇談会共同見解 平成元年3月23日

鳥取県・島根県の両県地域では、第一に、共通の歴史由来、地理的・自然的条件、産業・経済的条件などから、今後一層の給合を強め、一体化した広域経済圏を形成する必要がある。

- (1) その場合、従来の表日本に対する裏日本、あるいは山陽に対する山陰といった位置づけではなく、地域特性を基盤とした、独自の「地域アイデンティティ」を確立する。
- (2) 国際化時代に対応して、アジア地域で考えると、当地域は日本海を挟んで大陸への玄関口となる地理的位置づけになり、かつ、日本海地域の最も南に位置する地域となる。
- (3) 『平成』新元号制定のタイミングに合わせて、新地域名称「南日本海地方」を提唱する。『昭和』の元号と共に、「山陰」の暗いイメージと決別し、『平成』の時代は、明るい「南日本海地方」にイメージ・チェンジする。

第二位に、両県地域は、自然環境、産業環境ならびに生活環境の調和のとれた「ふるさと創生」の場とすることが望まれる。その中枢的な位置にある中海圏地域は、一体的な総合保養地域（リゾート地域）として、強力的に整備の推進を図るべきである。

第三に、鳥取・島根県地域の地域振興を図るためには、遅れている交通条件を早急に整備し、高速交通ネットワークの形成を図る必要がある。

## 2. 「山陰は天気が悪い」と言われるが……

「山陰は天気が悪い」「弁当忘れても傘忘れるな」と言われるが、実際に、山陰はいつも天気が悪いのだろうか。

- (1) 「緯度」： まず、「太陽光線の強さ」は、周知の通り「緯度」による。赤道直下が最も強く、緯度が高くなるほど弱くなる。鳥取市の緯度は35度29分、松江市の緯度は35度27分で、東京の35度41分よりわずかであるが南である。38度台の仙台、山形、37度台の新潟、福島は言うに及ばず、36度台の富山、長野、金沢、宇都宮、前橋、水戸より南にあり、同じ35度台ということでは銚子、東京、甲府、横浜、岐阜、彦根、名古屋、京都と変わらないことになる。
- (2) 「年間日照時間」： 太陽光線の強さは同じでも、曇りや雨の日が多く、晴れ間が少ないということがありうる。そこで「年間日照時間」を見ると、過去30年間の月別平均日照時間の年間計で、松江は京都と並び1700時間台、鳥取は、青森、新潟、山形、秋田、富山、金沢、福井と並んで1600時間台である。これらの主要都市と同水準であるから、日照時間が特に少ないということではないが、2000時間を超える岡山、甲府、岐阜、広島、名古屋には、遠く及ばない。ただし、4月から9月の夏場6ヶ月の日照時間を見ると、松江は、那覇、岡山、新潟、青森、秋田と共に1100時間を超えるトップグループであり、鳥取も、下関、広島、札幌、大阪、岐阜と共に1060時間を越え、900時間台の甲府、鹿児島、仙台、京都、800時間台の東京、水戸を大きく上回る。
- (3) 「年間降水量」： 次に、わが国で雨量が多い地域は、北陸、東北などの雪国と台風が頻繁に来襲する西日本地域である。「年間降水量」で見ると、最も多い地域は、金沢、福井、富山、鹿児島、那覇などで、年間2000mmを越える。鳥取、岐阜が1900mm台でこれに次ぎ、松江、佐賀が1800mm台、新潟、秋田が1700mm台と続く。山陰地方の降水量が突出して多いわけではない。

このように、山陰地方の天候は、突出して悪いわけではないのに、一般に、そのような印象を持たれるのはなぜだろうか。ひとつは、冬季の天候の悪さと不安定性である。

- (1) 「月別日照時間」： 「月別日照時間」を松江・東京で比較してみると、年間計では、松江1782時間に対し、東京1811時間で、東京が29時間多いだけで、あまり差はないが、4月～10月の春から夏、秋にかけては、どの月をとっても松江の方が良く、逆に、冬は東京の方が良い。すなわち、4月～10月は松江の方が毎月20時間から50時間も多いのであるが、逆に、11月～3月は松江の方が少なく、特に12月、1月、2月は毎月60時間～100時間も少ない。この冬季の日照時間の少なさが、「山陰はいつもどんよりとした曇り空」の印象を抱かせることになる。
- (2) 「変わりやすい天気」： また、冬季は日本海を渡る幾重もの筋雲の影響で、日光が差していたと思うと、にわかには雨が降りだして、しばらくするとまた青空がのぞくというように、天気が変わりやすい。これは、冬季の日本海側共通の気象現象である。「日降水量1mm以上



の日数」を見ると、金沢が180日で一番多く、福井、富山、秋田、新潟が170日台、青森160日台、これに次いで鳥取、松江も150日台と多い方である。水戸、東京、広島、甲府は90日台、岡山は80日台と少ない。この「日降水量1mm以上の日数」を月別に松江と東京で比べると、4月～10月は計4.3日しか差がないが、11月～3月で計50.1日も多く、冬はとにかく雨の降る日が多いことを示している。

- (3) 「比較相手」： さらに言えば、比較する相手を、無意識に同じ中国地方で、隣接する山陽地方と比較していることが多いのではないと思われる。瀬戸内海性気候の山陽地方は、わが国有数の晴天日数が多い地域で、天候は安定しており、降水量は干害が起きるほど少ない。ここと比較したのでは、勝ち目はない。
- (4) 「口コミ」： また、「弁当忘れても、傘忘れるな」というのは、前述のように、本来、山陰の冬の天気は変わりやすく、今晴れていても、すぐ雨が降ったり、また晴れたりするので、「忘れず、傘を持って行きなさい」という意味であるが、そうした本来の意味から逸脱して、「山陰はいつも雨が降っている」「山陰はいつも天気が悪い」から「傘を持って行きなさい」ということだ、と誤解されている。

地元の人達が、遠来のお客さんに対して、雨が降っていれば「山陰はいつも天気が悪くて……」とか、晴れていれば「いつも雨ですが、今日は珍しく晴れて……」などとリップ・サービスをしたり、また山陰の観光バスで、バスガイドが軽いノリで格言としてのみ「弁当忘れても、傘忘れるな」と紹介し、適正な説明をしないことも、「山陰はいつも天気が悪い」というイメージを助長し、それがいわゆる“口コミ”効果で広がっていることもあるのではないだろうか。



鳥取県・島根県は「南日本海地方」です

## 全国气象台所在地の緯度

	度 分		度 分
札 幌	43. 03	大 阪	34. 41
青 森	40. 49	奈 良	34. 41
秋 田	39. 43	岡 山	34. 39
仙 台	38. 16	広 島	34. 24
山 形	38. 15	高 松	34. 19
新 潟	37. 55	福 岡	33. 35
福 島	37. 45	高 知	33. 34
富 山	36. 42	佐 賀	33. 16
長 野	36. 40	大 分	33. 14
金 沢	36. 35	熊 本	32. 49
宇都宮	36. 33	長 崎	32. 44
前 橋	36. 24	宮 崎	31. 55
水 戸	36. 23	鹿 児 島	31. 33
銚 子	35. 44		
東 京	35. 41		
甲 府	35. 40		
鳥 取	35. 29		
松 江	35. 27		
横 浜	35. 26		
岐 阜	35. 24		
彦 根	35. 16		
名古屋	35. 10		
京 都	35. 01		

## 過去30年の平均月間日照時間の地域別比較 (単位) 時間

1月～12月合計		4月～9月の半年	
岡山	2083時間	那覇	1176時間
甲府	2075	岡山	1136
岐阜	2067	新潟	1133
広島	2020	松江	1125
名古屋	2015	青森	1122
大阪	1944	秋田	1101
那覇	1876	下関	1096
鹿児島	1875	広島	1096
佐賀	1869	札幌	1092
下関	1868	大阪	1070
長野	1852	鳥取	1063
奈良	1849	岐阜	1062
仙台	1843	奈良	1047
水戸	1830	福岡	1045
福岡	1811	金沢	1036
東京	1811	長野	1035
札幌	1805	佐賀	1032
松江	1782	山形	1022
京都	1708	富山	1021
青森	1695	福井	1020
新潟	1687	名古屋	1017
山形	1667	甲府	995
鳥取	1666	鹿児島	994
秋田	1642	仙台	930
富山	1608	京都	920
金沢	1605	東京	890
福井	1601	水戸	879

## 降水量の比較

(単位) mm, 日

年間降水量	多い順	日降水量 1 mm以上の日	
金 沢	2592.6	金 沢	180.9
福 井	2368.3	福 井	178.3
富 山	2295.9	富 山	177.6
鹿児島	2236.8	秋 田	173.8
那 覇	2036.8	新 潟	173.6
鳥 取	1949.5	青 森	164.3
岐 阜	1933.7	鳥 取	159.5
松 江	1894.8	松 江	153.7
佐 賀	1836.4	札 幌	137.8
新 潟	1778.3	山 形	135.6
秋 田	1746.4	那 覇	125.8
下 関	1659.9	鹿児島	125.0
福 岡	1604.3	福 岡	115.6
京 都	1581.1	岐 阜	115.2
広 島	1554.6	下 関	112.6
名古屋	1534.9	京 都	109.0
東 京	1405.3	長 野	108.5
青 森	1360.4	奈 良	108.1
奈 良	1354.6	佐 賀	106.2
大 阪	1318.0	名古屋	104.4
水 戸	1307.8	仙 台	101.4
仙 台	1204.5	大 阪	100.3
岡 山	1159.7	水 戸	99.9
札 幌	1129.6	東 京	99.2
山 形	1126.3	広 島	95.8
甲 府	1055.1	甲 府	90.9
長 野	983.3	岡 山	87.4

## 月間日照時間 東京と松江、鳥取比較

(単位) 時間

	東京	松江	東京との差	鳥取	東京との差
4月	161	181	20	170	9
5月	182	216	34	207	25
6月	123	172	49	158	35
7月	137	188	51	179	42
8月	177	215	38	206	29
9月	110	153	43	143	33
小計	890	1125	235	1063	173
10月	129	160	31	142	13
11月	137	111	-26	103	-34
12月	166	84	-82	84	-82
1月	175	72	-103	70	-105
2月	150	84	-66	73	-77
3月	165	144	-21	130	-35
小計	922	655	-267	602	-320
年間合計	1811	1782	-29	1666	-145

## 日降水量1mm以上の日数 東京と松江、鳥取比較

(単位) 日

	東京	松江	東京との差	鳥取	東京との差
4月	10.0	11.2	1.2	11.5	1.5
5月	0.6	9.9	0.3	10.4	0.8
6月	12.1	11.2	-0.9	11.9	-0.2
7月	10.0	10.5	0.5	10.7	0.7
8月	8.2	8.2	0	9.2	1.0
9月	10.9	12.3	1.4	12.8	1.9
小計	60.8	63.3	2.5	66.5	5.7
10月	8.9	10.7	1.8	11.4	2.5
11月	6.4	14.0	7.6	13.9	7.5
12月	3.8	16.5	12.7	17.1	13.3
1月	4.3	18.5	14.2	19.0	14.7
2月	6.1	15.9	9.8	16.8	10.7
3月	8.9	14.7	5.8	14.8	5.9
小計	38.4	90.3	51.9	93.0	54.6
年間合計	99.2	153.7	54.5	159.5	60.3

### 3. 「山陰のイメージ」アンケート調査

鳥取・島根両県経済同友会では、「山陰のイメージ・チェンジ」を提唱すると共に、山陰地域および周辺近県等に対し、「山陰のイメージ・チェンジ」に関するアンケート調査を行った。質問内容は、①「山陰」のイメージ、②山陰地方の実態についての認識、③「山陰のイメージ・チェンジ」への賛否、④キャッチ・フレーズ『南日本海地方』への賛否、などである。

山陰のイメージ・チェンジについてのアンケート

平成2年3月

1. 「山陰」のイメージをどう思いますか？	①暗い ②明るい ③普通 ④その他
2. 山陰地方の実態をどう思いますか？	①暗い ②明るい ③普通 ④その他
3. 山陰と関東の緯度及び年間日照時間がほとんど同じであることをご存じでしたか？	①知っていた ②知らなかった ③意外である
4. 「山陰」のイメージを変えよう、ということについて、どう思いますか？	①変える方が良い ②変えない方が 良い
5. 鳥取・島根の両県経済同友会が、共同で「南日本海地方」を山陰のキャッチ・フレーズとして提案していることをご存じでしたか？	①知っていた ②知らなかった
6. 「南日本海地方」という山陰のキャッチ・フレーズについてどう思いますか。	①良い ②良くない ③その他
7. 「南日本海フィッシャーマンズ・ワーフ」「南日本海ドーム」など、「南日本海」を使った名称についてどう思いますか？	①良い ②良くない ③その他
8. 山陰地域内の人に、引き続き住みたいと思いますか？	①住みたい ②住みたいとは思わない
地域外の人に、山陰に住んでみたい、または旅行してみたいと思いますか？	①旅行したい ②旅行したいとは思わない

1. 調査要領 アンケート地域 域内：鳥取，島根  
域外：東京，大阪，兵庫，岡山，広島，山口，福岡
2. 回答状況 発送数 432通  
回答数 103通 (域内 55通，域外 48通)  
回答率 24%

#### 4. アンケートの調査結果

調査結果を要約すると、以下の通りであった。

- (1) 「山陰のイメージ」は、「暗い」57.3%が、「普通」35.0%を大きく上回って、過半数にのぼっており、やはり巷間言われるように、「山陰のイメージは暗い」と思われていたことになる。山陰地域の域内と域外とで区別して見ると、域内では「暗い」61.1%、「普通」29.1%、域外では「暗い」52.1%、「普通」41.7%となっており、「暗い」と答えた人の割合は、域外より域内の方が高い。
- (2) 「山陰の実体」については、「普通」が62.1%、「暗い」が25.2%で、比率が逆転する。「明るい」との回答も、5.8%あった。域内・域外別には、「暗い」と答えた人の割合が、域内が34.5%で、域外の14.6%を大きく上回っている。したがって、イメージでも実体でも、域内の人の方が、「暗い」と思っている人の割合が大きいことになる。
- (3) 「山陰と関東の緯度および年間日照時間がほとんど同じである」ことについては、「知っていた」19.4%、「知らなかった」58.3%、「意外である」22.3%との回答である。知っていた人の割合は、全体の五分之一にも満たず、ほとんどの人が知らなかったことになる。特に22.3%の人は「意外である」と驚きを隠さない。域内・域外別では、あまり差がなく、域外の人の方が、「知らなかった」の割合がやや大きい。
- (4) 第1問の「山陰のイメージ」の質問で、「暗い」と答えた人に対して、「『山陰』のイメージを変えよう、ということについてどう思われますか？」と尋ねたところ、「変えた方が良い」が81.4%、「変えない方が良い」が15.2%で、圧倒的多数の人が、「山陰」のイメージを変えた方が良いと考えていることが分かった。「変えない方が良い」(15.2%)の理由は、山陰の「陰った明るさ」が良い、山陰の「良さ」を強調すべきである、などの考え方である。域内・域外別では、域内の方が、「変えた方が良い」82.4%、「変えない方が良い」14.7%と、「変えた方が良い」と思っている人の割合が高い。
- (5) 鳥取・島根両県経済同友会が、共同で『南日本海地方』を山陰のキャッチ・フレーズとし

鳥取・島根経済同友会 山陰のイメージ・チェンジについてのアンケート調査結果

質問事項	回答内容	比率 (%)	
1. 「山陰」のイメージをどう思いますか？	暗い 普通 明るい	57.3	
		35.0	
		2.9	
	域内	暗い 普通 明るい	61.8
			29.1
			1.8
域外	暗い 普通 明るい	52.1	
		41.7	
		4.1	
2. 山陰地方の実態をどう思いますか？	暗い 普通 明るい	25.2	
		62.1	
		5.8	
	域内	暗い 普通 明るい	34.5
			54.5
			3.6
域外	暗い 普通 明るい	14.6	
		70.8	
		8.3	
3. 山陰と関東の緯度及び年間日照時間がほとんど同じであることを御存知でしたか？	知っていた 知らなかった 意外である	19.4	
		58.3	
		22.3	
	域内	知っていた 知らなかった 意外である	21.8
			56.4
			21.8
域外	知っていた 知らなかった 意外である	16.7	
		60.4	
		22.9	
4. 「山陰」のイメージを変えよう、ということについてどう思いますか？ (1.の「山陰」のイメージが「暗い」と答えた人)	変える 変えない	81.4	
		15.2	
	域内	変える 変えない	82.4
			14.7
域外	変える 変えない	80.0	
		16.0	



質問事項	回答内容	比率 (%)	
5. 鳥取・島根の両県経済同友会が、共同で「南日本海地方」を山陰のキャッチ・フレーズとして提案していることを御存知でしたか？	域内	知っていた	13.6
		知らなかった	85.4
	域外	知っていた	16.4
		知らなかった	83.6
	域内	知っていた	10.4
		知らなかった	87.5
6. 「南日本海地方」という山陰のキャッチ・フレーズについてどう思いますか？	良い		50.5
		良くない	30.1
		その他	19.4
	域内	良い	49.1
		良くない	29.1
		その他	21.8
	域外	良い	52.1
		良くない	31.3
		その他	16.6
7. 「南日本海フィッシャーメンズ・ワーフ」「南日本海ドーム」など、「南日本海」を使った名称についてどう思いますか？	良い		55.3
		良くない	32.0
		その他	12.7
	域内	良い	56.4
		良くない	32.7
		その他	10.9
	域外	良い	54.2
		良くない	31.3
		その他	14.5

て提案していることに対しては、「知っていた」13.6%、「知らなかった」85.4%と、ほとんど知られていないことになる。

山陰地域内では、「知っていた」16.4%と、知っている人の割合がやや高まるが、いずれにしても、関心の度合いは低い。

- (6) 山陰のキャッチ・フレーズとして『南日本海地方』の評価は、「良い」50.5%、「良くない」30.1%、「その他」（どちらとも言えない）19.4%であった。域内・域外別にほとんど差がない。「良くない」という人が30.1%いるものの、「良い」という人が過半数を越えてることは、この種の提案としては、一応、受け入れられる提案として評価されていると考えられよう。

「良くない」「その他」（どちらとも言えない）は、名称だけ変えても仕方がない、南日本（九州）と間違える、位置がわかりにくい、などの意見である。

- (7) 『南日本海フィッシャーマンズ・ワーフ』『南日本海ドーム』などのように、『南日本海』を使った名称については、「良い」55.3%、「良くない」32.0%、「その他」12.7%と、賛成の人の割合がやや増加する。域内・域外別にはほとんど差がないが、域内の「良い」が56.6%とやや高かった。

## 5. イメージ・チェンジの先例『北陽』

山陰のイメージ・チェンジのころみは、先例がある。

昭和40年、「山陰を明るくする運動委員会」主催・毎日新聞社協賛で、「山陰に代わる新しい呼び名」の募集が行われた。当時の記録によると、「山陰」という言葉がかもしだす後進的イメージをぬぐい去って、明るい、住み良い地方づくりに積極的な民風を盛り上げることを目的として、全国に呼びかけたところ、12,421通の応募があった。鳥取・島根両県の「山陰を明るくする運動委員会」が審査し、各10点ずつ選出した後、東京在住の両県出身著名人が厳選した結果、『北陽』と最終決定した。

昭和40年7月11日米子市公会堂で開催された発表会には、一般市民等約1,000人が参集した。「日本海時代の訪れです。明るい郷土づくりに、みんなスクラムを組んで、“山陰”の言葉からの暗いイメージを打破しよう」との司会で始まり、野々村延・運動委員会会長（松江商工会議所会頭）の審査経過報告の後、西尾愛治・同副会長から新地方名が『北陽』と発表された瞬間、会場はどよめきから割れるような拍手に包まれた。「発表会場、拍手やまず」と毎日新聞には報道されている。

「山陰」の「陰」は、文字通り「かげ」であり、「裏」「かげ」「暗い」というイメージがつかまとう。辞書では「陰」は、①かげ、②日かげ、③ひそか、人に知られないもの、④生殖器、⑤消極的、静的……（三省堂「大辞林」）と説明されており、熟語としても、陰気、陰湿、陰鬱、陰惨、陰険、陰謀、陰部……など、マイナス・イメージにつながりやすい。

『北陽』は、暗いイメージの「陰」を廃し、明るいイメージの「陽」に代えようというもの

であったが、結果的には、定着しなかった。その理由として上げられたのは、①『北陽』では、どうしても『山陽』が意識される、②「北」は「陰」と同じく、マイナス・イメージがある、③協賛の毎日新聞社が表に出過ぎて、他のマスコミがほとんど取り上げなかったこと、④由緒ある「山陰」という地名に愛着があり、変えること自体無理があること、などである。今日でも、『北陽』は若干の民間企業名などに使われていて、その名残をとどめている。

## 6. 「自分達が住んでいる所が、常に『表』である」

先例の経験から、今回の提案にあたっては、次の諸点に配慮した。

- ① 鳥取・島根両県地域は、特に気象条件が劣るわけでも、暮らしにくいわけでもないことをPRする。
- ② 日本海からみれば、東が東北地方、西が朝鮮半島で、両県地域は最も南に位置するという地理的事実に着目する。
- ③ 由緒ある「山陰」という地名をなくするのではなく、キャッチ・フレーズとして用いる。
- ④ かねてより先進的提言活動の実績のある地元両県経済同友会の共同提案とする。
- ⑤ 特定のマスコミに片寄らないこと、など。

その結果、地域内の新聞・テレビ・ラジオなどのマスコミはもとより、東京はじめ全国のマスコミにニュースとして伝えられ、反響は少なくなかった。次いで、新聞・雑誌などのコラム・論説などで取り上げられ、講演会、フォーラム、対談なども催され、賛否両論、活発な討論が戦わされた。

これらのマスコミの論調、討論の争点などで、浮き上がってきたことは、以下の通りである。まず、

- (1) アンケートの結果にも出ているように、内外の過半数の人は「山陰のイメージは暗い」と考えており、「暗い」と考えている人のほとんどが「イメージを変えた方が良い」と思っている。
- (2) 『北陽』の「北」は、演歌、酒場、関取のしこ名などには悪くないが、人の住む町の地名には「南」が良い。「海水浴は南日本海へ」「南日本海マリーナ」「南日本海シーフード」「南日本海の夕陽」……
- (3) 自分達の住んでいるところが、常に「表」である。「裏」「陰」とは呼ばせない。自分達の地名は、自分達で決める。
- (4) 天候を、山陽地方と比べ勝ちであり、そうでなくとも、冬季はどこと比較しても良くないと思っている人が多い。しかし、冬季と言えども、厳しい寒さや降雪量の多い北海道、東北、北信越、北陸などのと比べると、決して悪くはない。
- (5) 「山陰のイメージは暗い」にしても、むしろ「陰った明るさ」が良いので、イメージ・チェ

ンジを図る必要はない、という有力な意見がある。若者のギンギラギンでなく、底抜けの青空でなく、多少もやったような青空が良い、落ち着いた大人の世界が良い、という主張である。

しかし、わび、さび、老人の静けさ、枯山水の世界では、一・二泊で通過する観光客はともかく、そこに一生をおくる住民にとっては甚だ面白くない。若者達の定着を促し、いったん郷里を離れた若者達を呼び戻すためには、明るい地域イメージづくりが必要である。

以上、要するに、「鳥取・鳥根」という場合と、「山陰」という場合とで、地域イメージに差があるということである。

まず、①「鳥取・鳥根」という場合は、季候も暮らしやすさも、特に悪くはなく、地名イメージも暗くない。しかし、全国での知名度・認識度がいたって低く、存在感が薄い。

逆に、②「山陰」という場合、地名の知名度は極めて高く、全国的に知らない人はいないが、イメージはいかにも暗い、ということである。

こうしたキャンペーンを通じて、実感したことは、地域の実情がその他の地域、あるいは全国へ、なかなか伝わりにくい、ということである。「山陰」の文字からくるイメージもさることながら、「山陰の実体」が正しく伝えられていないことの方が、より根本的な問題ではないか。山陰地方の天候が、言われるほど悪くないこと、生活のしやすさ、暮らしの豊かさは、むしろ、上位グループに属することが正しく伝えられていけば、「山陰のイメージ」も自ら違ったものとなったであろう。

したがって、大切なことは、「地域発・全国行」の情報を、いかに数量的に多く、反復的、継続的に、かつ効果的に発信していくかである。従来からの「山陰発・全国行」の情報が、極めて少ないか、あるいは片寄っているため、その結果として、現在の全国的な「山陰の地域イメージ」が形成されたのかも知れない。

それでは、「山陰発・全国行」の情報発信は、どのようになっているのだろうか。

### 第三章 「山陰情報」——「山陰発・全国行」の情報発信

一般に全国の情報の流れは、「中央発・地方行」の情報が圧倒的に多く、「地方発・中央行」「地方発・全国行」の情報は少ないと言われる。特に、産業・経済面での後進地域、あるいは「過疎」と呼ばれる地域からの情報が、「中央行」さらに「全国行」のルートに乗ることはまれであろう。わずかにあったとしても、農村・森林・山岳など未開発の自然の様子、あるいは「過疎」をテーマにした情報などであろうことは、一般に想像に難くない。東京で山陰地方からの出身者に尋ねても、「東京で山陰のニュースなど見たこともない。ほとんど無いのではないか」との回答である。まして山陰に何ら所縁の無い人々の目に止まることは、もっと少ないに違いない。これでは、前述のように「山陰の生活の豊かさは高い」と言っても、その実態が伝えられる機会は少なく、従って、いったん形成された「裏」「陰」「暗い」という「山陰の地域イメージ」は、なかなか変えられないということになる。

筆者は、平成元年4月から9年3月まで8ケ年間、山陰放送ラジオのコメンテーターを勤めた。その機会に、山陰地方のニュース等がどのように東京に伝えられるか、「山陰発・中央行」のニュースや記事、コメントなどの情報を「山陰情報」と呼んで、フォロー・アップして見た。主として四大新聞の東京版からであるが、その他、テレビ、雑誌等で、目につくものは収集した。これらの「山陰発・中央行」のニュースの多くは、そのまま「全国行」の情報として、広く他の地域にも伝達されたものと思われる。

#### 1. 増加してきた「山陰情報」

調査の結果、「山陰発・中央行」の情報は「ほとんど無いのではないか」という一般の印象からすると、意外なことであるが、実際にはそれほど少なくはなく、年間平均97.8件登場している。確かに平成3年頃までは、比較的情報件数が少なく、「細い望遠鏡で山陰を見ている」ような「心細い」思いをしたこともあるが、近年の平成5年～8年では別表のように、①上淀廃寺・加茂岩倉遺跡など画期的な遺跡の発見、②行動派岩国哲人出雲市長（当時）の活躍、③中海干拓再開問題、および④堅調な地域づくり・イベント情報などにより、増加してきている。平成5～6年は年間70件程度であったが、平成7年は103件、平成8年は148件と、ほぼ2倍の大きさである。月間平均登場件数で見ると、平成5～6年頃は6件程度であるが、平成7年は8.6件、平成8年は12.3件となり、平均的にならせば、週2～3件は「山陰情報」が全国に流れたことになる。もとより、ニュース性の軽重によりマスコミの取り上げ方に違いがあり、種々のニュースが次々と登場する場合と、同じニュースが一時的に多数のマスコミに取り上げられた場合とでは、実質的な情報の質や量に差があることは確かであるが、情報を受け取った側にどれだけ「山陰」の印象が残るかという点では、それほどの優劣はなく、第一義的には、どれだけ数多くの「山陰情報」がマスコミに取り上げられたかが重要である。

## 山陰情報の分類と件数の推移

(単位 件)

		地域づくり・イベント	地域産業	自然・社会・生活	コメント・人物紹介	合計 (比率)		
平成5年	島根	4	4	10	10	28	(38.9%)	
	鳥取	12	14	18	0	44	(61.1 )	
	計	16	18	28	10	72	(100.0 )	
							(6.0件/月)	
平成6年	島根	8	2	23	7	40	(58.8%)	
	鳥取	11	4	10	3	28	(41.2 )	
	計	19	6	33	10	68	(100.0 )	
							(5.7件/月)	
平成7年	島根	13	6	23	7	49	(47.6%)	
	鳥取	26	15	9	4	54	(52.4 )	
	計	39	21	32	11	103	(100.0 )	
							(8.6件/月)	
平成8年	島根	12	7	76	7	102	(68.9%)	
	鳥取	17	9	16	4	46	(31.1 )	
	計	29	16	92	11	148	(100.0 )	
							(12.3件/月)	
合計	島根	37	19	132	31	219	(56.0%)	
		(16.9%)	(8.7)	(60.3)	(14.1)	(100.0)		
	鳥取	66	42	53	11	172	(44.0 )	
		(38.4%)	(24.4)	(30.8)	(6.4)	(100.0)		
	計	103	61	185	42	391	(100.0 )	
		(26.4%)	(15.6)	(47.3)	(10.7)	(100.0)		
	月平均	(2.1件/月)	(1.3件/月)	(3.8件/月)	(0.9件/月)	(8.1件/月)		

## 2. 「山陰情報」の内容

次に、「山陰情報」の内容を分類すると、「自然・社会・生活」に関するものが、46.8%と最も多く、おおむね半数近くを占める。しかし、「地域づくり・イベント」に関するものも26.3%と比較的多く、「地域産業」に関するものが15.6%、山陰出身の著名人等の「コメント・人物紹介」が10.7%の比率となっている。

- (1) 「自然・社会・生活」関連が多いのは、①『美保関隕石』、②上淀廃寺・加茂岩倉遺跡、③行動派岩国哲人出雲市長、④大山遭難・乳児誘拐事件・中海干拓再開問題など、多数のメディアが同時に取り上げ、かつ続報などが継続的に報道されることによる。
- (2) 「地域づくり・イベント」関連は、①市民主体の地域づくり活動、②地方行政の地域開発事業、③市民・行政が一体となったイベントなどである。「地域づくり運動」は、近年、全国各地で大変活発に展開されるようになった。「山陰情報」での「地域づくり・イベント」関連ニュースは、単発的なものも少なくないが、内容が極めて多種多様であり、地域性のあるユニークなものが、次々と手を変え品を変え、多数、持続的に登場しており、山陰地域でも活発な地域づくり活動が展開されていることを伺わせる。
- (3) 「コメント・人物紹介」は、山陰出身の有識者のコメント、および、山陰地域の著名人・ユニークな人材等を紹介したものである。有識者コメントでは①恒松制治前島根県知事・前獨協大学長が地方分権や地方行政問題で、②岩国哲人前出雲市長が市長当時の酒・タバコ等自動販売機規制および地方分権問題等で、③保母武彦島根大学教授が中海干拓再開問題で、再三登場する常連となっている。人物紹介では、西尾邑次鳥取県知事、太田満保平田市長、「本の学校」の永井伸和今井書店社長、「ゲゲゲの鬼太郎」の漫画家水木しげる、デザイナー森英恵、ニュースキャスター・エッセイスト福島敦子から、第16回現代日本彫刻展大賞受賞の井田勝己県立境高校美術教諭、「土に生きる」という島根県斐川町の農業黒田富広さん等、多くの著名人やユニークな人材が紹介されている。
- (4) 島根・鳥取の県別に見ると、島根県の件数は平成5年の28件から、平成6年40件、平成7年49件へ、更に平成8年には102件と著増している。平成8年の著増は加茂岩倉遺跡の発見によるものである。鳥取県の件数は、平成6年が28件とやや少ないが、他の年は概ね40~50件程度である。島根・鳥取両県の割合は、平成5年~8年を通してみると、島根県56.0%、鳥取県44.0%と、島根県の方がやや大きい比率になるが、年別には平成5年と7年は鳥取県が多く、平成6年と8年は島根県が多いというように、全体では両県にそれほど差はない。

しかし、内容別には、島根県は「自然・社会・生活」が全体の60.3%を占め最も多く、鳥取県は「地域づくり・イベント」が同38.4%を占め最も多い。また、各年とも、「地域づくり・イベント」および「地域産業」は鳥取県の方が多く、「自然・社会・生活」および「コメント・人物紹介」は島根県の方が多いという特徴がある。

### 3. 定番「山陰情報」の代表例

山陰発・中央行の「山陰情報」は、「ほとんど無いのではないか」というのが、一般の印象であるが、実際にはそれほど少なくは無く、前述のように、年間平均97.8件（月平均8.1件）も登場している。それらの「山陰情報」のほとんどは、一過性のものであり、ある一つのメディアに取り上げられるだけで大した反響も無く、直ちに過去のものとなって消え行ってしまうものであるが、しかし、一部には、多数のメディアが同時に取り上げ、大きな反響を呼び、全国的に強い注目を浴びたり、また、その後も継続して関心を持たれ、繰り返し報道されたものもあった。

平成5年から6年にかけて、『上淀廃寺』（鳥取県淀江町）、『美保関隕石』（鳥根県美保関町）および「岩国哲人出雲市長」（鳥根県出雲市）の3件は、そうした意味の定番「山陰情報」であった。

- (1) 鳥取・鳥根県境地域は、もともと古墳の宝庫であり、多数の古代遺跡の発掘が進められているが、今回の『上淀廃寺』も、発掘された全国最古級の彩色仏教壁画の一部、塑像片、壁画片などから創建時期や創建者の推定、創建目的などをめぐる議論は、壮大な「古代ロマン」であった。
- (2) 『美保関隕石』は、偶然、鳥根県美保関町の民家に落下したものであるが、861年に福岡県直方市に落下した『直方隕石』と同じ母体から飛び出した「双子」らしいことが判明した。二つの隕石は、約6000万年も宇宙を漂った後、1100年の時間差で僅か300kmしか離れていない場所に落下したことになり、こちらは壮大な「宇宙ロマン」がくり広げられた。
- (3) 岩国哲人市長時代の出雲市は、岩国市長自身が米国メリル・リンチ社副社長から転身したことが、まず、「華麗なる転身」として注目をされ、その後、国際派・行動派市長の打ち出す諸改革、新制度の実施が、全国的な話題となった。特にゴミの有料化および酒・タバコの自動販売機規制は、地方の「小さな都市の大きな挑戦」として、全国に先駆けたもので、その先進性を示すところとなった。

しかし、平成7年になると、これらの3件はほとんど取り上げられなくなった。『上淀廃寺』は発掘が一段落して、新たな発見が無くなり、『美保関隕石』は地元の名物「隕石饅頭」だけを残して、専門的な研究のため科学者の手に委ねられ、また、東京都知事選挙に出馬するため市長を辞任した岩国哲人氏が去った後の出雲市は、マスコミに全く見向きもされなくなった。

その代わりに、新たに登場した定番「山陰情報」が『本の学校』（鳥取県米子市）および『水木しげるロード』（鳥取県境港市）である。

- (4) 『本の学校』は、山陰両県に書店の有力なチェーン網を持つ今井書店が、ドイツの書籍業訓練学校をモデルに設置したもので、本作りから書店経営まで、出版にかかわるすべての業務が学べる。スーパーやコンビニに押されっぱなしの「町の本屋」の起死回生を目指す動きとして注目され、全国の書店、出版社、取次店などから視察が相次ぎ、公開セミナー、



シンポジウム、新人教育講座など、精力的に活動している。

- (5) 『水木しげるロード』は、「ゲゲゲの鬼太郎」や「河童の三平」などで知られる漫画家水木しげるの出身地の境港市で、水木しげるの漫画の世界をモチーフに「ゲゲゲの鬼太郎」「ねずみ男」など妖怪のブロンズ像80体を配置して作った歩道である。「鳥取県景観大賞」にも選ばれ、町づくりの成功例として知られる。

平成8年になると、この2件も先細りになり、代わって大きく取り上げられるようになったのが、まず「中海干拓再開問題」（鳥取県・島根県）、続いて『加茂岩倉遺跡』（島根県加茂町）である。

- (6) 「中海干拓再開問題」は、「宍道湖・中海干拓・淡水化事業」の最大工区「本庄工区」について、いったん中断していた干拓工事を、平成7年（1995年）11月島根県の澄田信義知事が再開する考えを表明したことから、再び、事業そのものの意義、干拓した土地の利用方法、採算性、環境問題、住民投票要求など、「再開の是非」をめぐる議論が沸騰し、また、国の公共投資の見直し、財政改革論議とも関連し、全国的に注目されることとなったものである。マスコミの論調は、工事の再開に極めて批判的で、かつて、出雲市がゴミの有料化および酒・タバコの自動販売機規制で全国に先進性を見せたこともあり、議論の民主的な進展が期待されたが、島根県議会が住民団体の住民投票条例制定の直接請求を否決してから、マスコミの扱いは急速に沈静化した。
- (7) これに代わって、『加茂岩倉遺跡』の発見が空前の大ニュースとなった。平成8年（1996年）10月島根県加茂町岩倉の農道工事現場で、弥生時代中期（紀元前1世紀～1世紀）の銅鐸39個が出土したもので、これだけ多数の銅鐸が一か所から出土した例はない。この「加茂岩倉遺跡」から北西に3kmほどしか離れていない「荒神谷遺跡」（島根県斐川町）からは、約10年前、銅剣358本と銅鐸6個が出土している。これほど多数の銅鐸や銅剣を、誰が、何のために埋めたのか、考古学者、マニアの間で諸説紛々である。引き続き詳細な調査で、①4個の銅鐸には「×」印がついており、荒神谷遺跡の銅剣のほとんどについている「×」印と類似していること、②7組8個の銅鐸が、これまでに近畿などで出土している銅鐸と同一鑄型で作られた兄弟銅鐸であること、③全国で先に発見されている銅鐸のうち54個は絵が書かれている絵画銅鐸であるが、今回は4個が同様にシカ、イノシシ、トンボなどの絵が書かれていること、などが判明し、こうしたニュースが次々と紙面を賑わした。遺跡発見から3か月間で52回も取り上げられた例は空前絶後であろう。

この他、これほど大きな扱いにはならないにしても、島根県の宍道湖、出雲大社、築地松、鳥取県の大山、二十世紀ナシ、砂丘などは、一応、定番「山陰情報」として、時々登場する。加えて、「コメント・人物紹介」では、恒松制治前島根県知事、岩国哲人前出雲市長、保母武彦島根大学教授、富野暉一郎同・前逗子市長、デザイナー森英恵、俳優佐野史郎なども、常連となっている。

また、近年の特筆すべき動きであるが、①平成6年夏の猛暑で、各地の渇水対策がニュースになった時、「鳥取大学乾燥地研究センター」の乾燥地農業技術が紹介されたり、②平成7年10月宮城県気仙沼船員養成所のマグロ漁師志願者が増大しているニュースで、島根県隠岐・西の島町の漁師募集の先例、③平成7年10月全国のブナの実の大豊作のニュースで、大山のブナ林の研究、④平成8年5月全国各地の「文学館」の相互協力を提案するニュースで、島根県津和野の『森鷗外記念館』が“心配りの行き届いた”“見応えのある文学館”として紹介されるなど、中央ないし他の地域のニュースの中で、山陰地方のケースが引き合いに出されるようになった。これは、「山陰情報」の確かな手ごたえであり、「山陰発・中央行」あるいは「全国行」の「山陰情報」が各地で蓄積され、反響していることを意味していると考えられる。

## おわりに

地域開発の究極の目標は、「今、現に、そこに住んでいる人々が、互いに郷土愛によって結ばれ、自分達の地域に自信と誇りを持ち、かつ、それぞれに生き甲斐を持って、生き生きと暮らしているような地域」をつくることである。

主役は、「今、現にそこに住んでいる人々」である。企業誘致でよそからやって来る人達や、郷里を離れた若者達ではない。その地域の人々が、互いに郷土愛によって結ばれ、自分達の地域に自信と誇りを持っていることが肝心である。地域開発の出発点は「郷土愛」である。「郷土愛」がなければ何事も始まらないし、人々が「郷土愛」で結ばれている地域でなければ、地域開発は成功しない。

そして、自分達の地域に「自信と誇り」を持てるためには、自分達の地域の良いところ、悪いところを正しく認識する必要がある。マスコミなどで多くの場合、悪いところばかり強調されて、むしろ、自信を失う結果となり勝ちであるが、実際には、地域地域のそれぞれに、他の地域にはない優れたところが必ず存在する。『地球カルテ』を用いて「地域診断」を行い、自分達の地域の優れたところを、「優れている」と正しく評価、認識することが大切である。「良いところ」を「良い」と認識しないのは、美味しい物を食べて味が分からないのと同じで、せっかくの「良さ」が無駄になる。

地域の経済開発は引き続き重要であるが、これからの豊かな時代、長寿時代を迎えるにあたり、地域の生活しやすさ、暮らしの豊かさは、より重要である。山陰地方の「生活しやすさ」「暮らしの豊かさ」は、わが国47都道府県で比較して上位グループにあり、山陰地方の人々は、自分達の地域に「自信と誇り」を持つべきである。

しかし、「裏」「陰」「暗い」と言われる「地域イメージ」や、「過疎」「高齢化」の代表地域というレッテルは、そのための大きな妨げとなっている。マイナス・イメージに付きまとわれては、自分達の地域に「自信と誇り」を持つことはできない。その意味で、どのような「地域イメージ」を形成するかは重要である。

「地域イメージ」の形成に、マスコミの影響力は大きい。「山陰発・全国行」の「山陰情報」は、「ほとんど無いのではないか」というのが、一般の印象であるが、実際は決して少なくはなく、平均的には毎週2～3件は登場している。取り上げられる分野も「自然・社会・生活」「地域づくり・イベント」「地域産業」「コメント・人物紹介」などの広範な分野に渡っており、中には、『上淀廃寺』『加茂岩倉遺跡』など画期的な遺跡の発掘、「岩国哲人市長時代の出雲市」「本の学校」「水木しげるロード」「中海干拓再開問題」などのように、多数のメディアが同時に取り上げ、大きな反響を呼び、全国的に注目され、その後も繰り返し報道される定番「山陰情報」となったのも少なくない。また、それほど大きな扱いははならないにしても、鳥根県の宍道湖、出雲大社、築地松、鳥取県の大山、二十世紀ナシ、砂丘なども、定番「山陰情報」となっている。しかし、山陰地方の「生活しやすさ」「暮らしの豊かさ」を伝える情報は皆無であり、「裏」「陰」「暗い」といわれる「山陰のイメージ」を変えるような情報が目に止まるこ

とはほとんどない。

今回の鳥取・島根両県経済同友会による「山陰のキャッチ・フレーズ『南日本海地方』」の提案は、当時、地域の内外で大きな反響を呼んだが、その後数年を経て、やはり尻つぼまりとなり、結局、前回の『北陽』と同様、定着するには至らなかった模様である。歴史的な重みのある地域名称の変更にかかわるような提案は、見えない大きな壁に立ち向かうようなもので、容易なことではない。マイナス・イメージの地域名称を持った山陰地方は、それだけでハンディ・キャップを負っているとも言える。これからも、地域の人々によって、幾多のころみが続けられると考えられるが、「明るく、生活しやすく、暮らしの豊かな地域」のイメージが形成された時こそ、そこに住んで見たいという人々を引きつけ、いったん郷里を離れた若者達を呼び戻すことができることになるであろう。

## 定番「山陰情報」の代表例

<p>『上淀廃寺』 (鳥取県淀江町)</p>	<p>平成4年(1992年)11月鳥取県淀江町の上淀廃寺から、全国最古級の彩色仏教壁画の一部や多数の塑像片、壁画片などが出土した。</p> <p>620~630年に建造されたと推定されている近くの古墳の盛り土から、上淀廃寺に使われたとみられる平瓦の破片が見つかったことから、奈良・法隆寺(通説では607年創建)と同時期の創建ではないか、あるいは、上淀廃寺の丸瓦に書かれた干支から、天武12年(683年)頃の創建ではないかなど、創建時期や創建者、創建目的などをめぐる活発な論議が展開された。</p>
<p>『美保関隕石』 (鳥根県美保関町)</p>	<p>平成4年(1992年)12月10日鳥根県美保関町の民家に落下した隕石。大音響とともに会社役員松本優さん(56)宅の屋根を突き抜け、床下に落ちた。長さ24cm、最大12cm、厚さ11cmの三角形で、重さは6.385kg。天文愛好家の軌道解析で、火星と木星の間にある小惑星群から飛来したらしいこと、および、国立科学博物館や岡山大学地球内部研究センターなどの分析で、この『美保関隕石』と、平安時代の861年に福岡県直方市に落下した『直方隕石』が、同じ母体から宇宙間に飛び出した「双子」らしいこと、などが判明した。二つの隕石は、約6000万年も宇宙を漂った後、1100年の時間差で僅か300kmしか離れていない場所に落下したことになる。</p>
<p>出雲市 岩国哲人市長 (鳥根県出雲市)</p>	<p>岩国哲人氏は、昭和11年(1936年)大阪生まれ、小学2年から高校卒業まで出雲市で過ごした。東大法卒。日興証券、米国メリル・リンチ社副社長を経て、平成元年(1989年)から二期、出雲市長を勤めた。在任中の①総合福祉カード、②ゴミ有料化、③タバコ・酒自動販売機規制、④木造出雲ドーム、⑤出雲大学駅伝、⑥樹医制度、⑦小学校木造化など、諸々の改革、新制度の実施が全国的な話題となった。また、証券界における国際的なキャリア、地方自治体にかかわる見識などから、国際問題、地方分権問題などにコメントを求められ、たびたびマスコミに登場した。平成7年(1995年)3月出雲市長を辞任し、東京都知事選挙に立候補したが、第3位にとどまり、当選できなかった。</p>

<p>『本の学校』 (鳥取県米子市)</p>	<p>鳥取、鳥根県に30余店をもつ今井書店グループ(今井伸和社長)が、平成7年(1995年)1月米子市に開設した。鉄筋2階建て校舎兼モデル書店(約30万冊)と鉄筋平屋建てメディア館(電子ブック、CDなど)からなる。ドイツ・フランクフルトの書籍業訓練学校「ブーフ・シュレー」をモデルにしたもので、本作りから書店経営まで、出版にかかわるすべての業務が学べる。印刷・製本などの手順を見せる工房や「本の博物館」「こども図書館」も備え、「研修室」で商品知識の講座、「モデル書店」で書籍販売の実習ができる。スーパーやコンビニに押され、全国で毎年1千件近い書店が消えている中、地方から「町の本屋」の起死回生を目指す動きとして注目された。全国の書店、出版社、取次店などから視察が相次ぎ、公開セミナー、シンポジウム、新人教育講座の開催など、精力的な活動を行っている。</p>
<p>『水木しげるロード』 (鳥取県境港市)</p>	<p>「ゲゲゲの鬼太郎」や「河童の三平」などで知られる漫画家水木しげるの出身地の境港市で、水木しげるの漫画の世界をモチーフに“ゲゲゲの鬼太郎”“ねずみ男”など妖怪のブロンズ像80体を配置した歩道。平成4年(1992年)から町づくりの一環として整備を進め、平成8年(1996年)8月に完成した。この間、平成6年(1994年)9月「鳥取県景観大賞」に選ばれた。完成記念行事として、「世界妖怪会議」や「水木しげる公開座談会」の開催、「ファンクラブ・ゲゲゲのしげる会」設立総会などを行い、話題を呼んだ。</p>
<p>『中海干拓再開問題』 (鳥根県・鳥取県)</p>	<p>「宍道湖・中海干拓、淡水化事業」は、戦後の食料増産政策から宍道湖・中海の浅瀬部分を干拓して水田を造成し、その水田の農業用水を得るため、海水混じりの汽水湖である宍道湖・中海を淡水化しようというもので、昭和30年(1955年)4月、最大工区の「本庄工区」は国の直轄事業とされ、14年後の昭和44年(1969年)6月工事に着手した。しかし、当時すでに米需給は供給過剰に転じており、翌昭和45年(1970年)2月には開田抑制・減反政策が打ち出されたのであるが、そのまま工事を続行し、18年後、干拓・淡水化のための堤防・水門がほぼ完成した昭和63年(1988年)7月になって、農水省は淡水化延期を決定、同9月農水省と鳥根・鳥取両県が協定書に調印し、本庄工区の工事が中断された。</p>

	<p>その後、平成7年(1995年)11月島根県の澄田信義知事が本庄工区の工事を再開する考えを表明したことから、再び、①事業そのものの意義、②干拓した土地の利用方法、③採算性、④環境問題、⑤住民投票要求など、「再開の是非」をめぐる議論が沸騰し、また、国の公共投資の見直し、財政改革論議とも関連し、全国的に注目されることとなった。</p>
<p>『加茂岩倉遺跡』 (島根県加茂町)</p>	<p>平成8年(1996年)10月14日島根県加茂岩倉の農道工事現場で、弥生時代中期(紀元前1世紀～1世紀)の銅鐸31個が出土した。個数は、その後、入れ子状態のものなども発見され、最終的には39個となった。わが国全体では、既に460個の銅鐸が出土しているが、一か所からの出土としては、これまで滋賀県野洲町「大岩山遺跡」の24個が最多で、今回の発見はそれを大きく上回った。この「加茂岩倉遺跡」から北西に3kmほどしか離れていない「荒神谷遺跡」(島根県斐川町)でも、約10年前、銅剣358本と銅鐸6個が出土している。これほど多数の銅鐸を誰が、何のために埋めたのか、考古学者、マニアの間で、「出雲自立説」「近畿決別説」「九州近畿国境説」「銅鐸マケット説」「青銅器産地説」「中古品説」「銅鐸文化発展段階説」など、諸説紛々である。引き続き詳細な調査で、①4個の銅鐸には「×」印がついており、荒神谷遺跡の銅剣のほとんどについている「×」印と類似していること、②7組8個の銅鐸が、これまでに近畿などで出土している奈良県上牧町・上牧銅鐸、和歌山市・太田黒田銅鐸、兵庫県豊岡市・気比2号・4号銅鐸、神戸市・桜が丘3号銅鐸、鳥取県岩美町・上屋敷銅鐸など同一鑄型で作られた兄弟銅鐸であること、③全国で先に発見されている銅鐸のうち54個は絵が書かれている絵画銅鐸であるが、今回は4個が同様にシカ、イノシシ、トンボなどの絵が書かれていること、などが判明し、尽きない興味を呼んでいる。</p>